

Space Japan Review 第 50 号発刊に向けて 簡単な歴史

AIAA-JFSC（衛星通信フォーラム）の機関誌である Space Japan Review（SJR）が 1999 年発行以来今号で第 50 号を迎えることになった。ここでは簡単に歴史を振り返ってみたい。

AIAA-JFSC の発足

SJR の発行母体である JFSC は、1999 年 1 月に設立された。その経緯は以下のとおりである。1998 年 2 月 23 日～27 日に、AIAA 第 17 回通信衛星システム国際会議（17th International Communications Satellite Systems Conference and Exhibit, 以下第 17 回 ICSSC）がパシフィコ横浜で開催された。本会議は、32 年間の ICSSC の歴史の中で北米以外で初めて開催される地として我が国が選ばれたものであった。第 17 回 ICSSC は、参加登録者は予想をはるかに超えて 16 か国から 517 名が、また、展示には 2700 名を超える人々の来場があり成功裏に開催することができた。



1998 年 2 月 26 日 17th ICSSC における
TCCS 会合開催を前にして撮影

AIAA 第 17 回 ICSSC が成功裏に終わったことを受け、このようなアクティビティを継続するとともに、AIAA の日本およびアジアでの会員を増やし、また、特に若い会員を獲得することにより、AIAA の活動のより一層の活性化を目的として、AIAA 日本支部を設立してはどうかという提案を第 17 回 ICSSC 組織委員会に行い賛同を得、AIAA 日本支部設立準備委員会を組織して検討を行った。日本支部の活動は当面、衛星通信分野の活動に焦点を当てることとし、他分野との連携を図っていくこととした。

AIAA 本部からもこのような日本支部の設立提案を支持する旨のコメントを得た。ただ、AIAA 日本支部を設立するには種々の意見が国内関係者にあったことから、AIAA 日本支部設立準備委員会において議論した結果、当初計画した活動を一刻も早く開始するため、日本支部ということではなく、衛星通信部門のみでとりあえず活動を開始することがよいとの結論に至り、AIAA 本部と打ち合わせを行った結果、具体的には、AIAA の通信システム技術委員会(TCCS)のサブコミティーとしての活動を行うこととなった。名称としては「AIAA Japan Forum on Satellite Communications -A Subcommittee of the TCCS-（日本名：AIAA 衛星通信フォーラム、略称 AIAA-JFSC）」とすることとした。そして、1998 年 11 月 20 日に TCCS が開催さ

れ、満場一致でこの方針が承認された。また、電子情報通信学会通信ソサイエティにも了解を得た。

その後、AIAA-JFSC は、後述するように機関誌として SJR を発行するとともに、毎年マイクロウェーブ展示会 (APMC 及び MWE) でシステム展示を行っていること、Japan Aerospace Communications Award を発行していること、AIAA での Aerospace Communications Award の支援を行っていること、ICSSC において開催される Award Luncheon をサポートしていること、2003 年に再び日本で開催された ICSSC の実行委員会、また 2007 年韓国ソウルで開催される ICSSC の実行委員会に人材を協力するという活動を継続している。

AIAA-JFSC 機関誌 SJR の発行

AIAA-JFSC は当初よりその活動の目玉として、機関誌 SJR を発行することにした。1999 年 2 月号、創刊号の表紙、目次は図に示すようなもので、JFSC 第 1 回総会 (1999 年 1 月 27 日開催) に間に合わせる形で発刊された。当初は和文のみで毎月発行することとした。しかし、AIAA 本部から英文化への強い要望があり、第 6 号以降、日本語及び英語対応とし、隔月刊での発行に変更した。

こうして通算 15 号まで発行したが、紙での発行は、記事の締め切りの制約、ページ数の制約、図のカラー化の制約、そして何よりも経費的負担が莫大であったことから、IT 化に対応して SJR を電子化して Web ベースで閲覧できるようにし、さらなる内容の充実を目指して、紙面での配布を 2001 年 2 月/3 月号をもって終了した。日本語版 SJR については無料閲覧としたが、英語版 SJR の Web での閲覧には、AIAA の要望もあって、パスワードを付与し、AIAA 本部のホームページからの英語版 SJR の閲覧が可能となるようにした (その後、日本版 SJR の Web ページに統合)。

SJR の掲載記事の編集を行うために SJR 編集委員会を当初より設置し、毎月委員会を開催して、記事集めの相談を行うとともに、そのときのトピックスの情報交換、各号の編集とりまとめ責任者を決めたりすることを行っている。



1998 年 11 月 20 日ジョージワシントン大学における TCCS 会合終了時に撮影



2003 年 ICSSC における Japan Aerospace Communications Award 受賞式にて撮影



Space Japan Review 創刊号 1999 年 2 月号 目次

Space Japan Review 創刊に寄せて

AIAA (アメリカ航空宇宙学会) 事務局長 コート・ドロヒャー
米ジョージ ワシントン大学教授(前 NASA 副長官)

バートン・I・エデルソン

AIAA-TCCS 技術委員会委員長 チャンドラ・クッシャー

AIAA 衛星通信フォーラム会長 関本忠弘

郵政省技術総括審議官 齋 昭男

宇宙開発事業団副理事長 五代富文

世界の衛星企業 CEO に聞く<1>

ロラルスペースアンドコミュニケーションズ社

グレゴリー・クラーク社長

総力特集

ギガビット衛星その夜明けと活動

郵政省通信総合研究所 飯田尚志・門脇直人

スペースジャパクラブ<1>

衛星通信開発のために汗をかく男たちに会いたい

ニール・R・ヘルムさん

米国通信衛星開発の歴史と展望 1 THE HISTORY & VIEW

北爪 進(NEC エグゼクティブコンサルタント)

Selected Paper I

ギガビット超高速衛星通信ネットワーク

SATCOM 相談室 Q&A

<衛星通信と私①>

国際事件報道と衛星 カナダ国営放送協会(CBC)東京支局長

ユージェット・ラブリーズさん

学会だより

SJR 創刊号の表紙と目次

英訳についてはかなり負担が大きい、このため、翻訳の専門家に依頼したり、英訳したものが英語として通じるか見て貰うために米国の方の好意に頼ったりしている。また、最近では、英訳ソフトウェアを導入して補助として使用している。筆者の案ではあるが、英訳したものを和訳のソフトウェアにかけて、意味のある日本語になるかどうかチェックし、不満足なら修正の上、さらに和訳のソフトウェアを通すことの繰り返しがいいのではないかと考えている。

最後になりましたが、これまで多くの方々から記事を提供して頂き大変感謝しております。SJR を定期的に発行するには今後も相当の努力が必要なのですが、SJR 編集委員一同頑張っていきたいと思っておりますので、引き続き、AIAA-JFSC の活動にご理解ご支援頂くとともに、SJR をお引き立て頂くようよろしくお願い致します。

文責 飯田尚志 編集特別顧問

本稿をまとめるに当たり北爪進氏の支援を受けた。ここに感謝します。